

発刊の辞

『古事記』の学際的・国際的研究プロジェクト代表 武田秀章

『古事記』は言うまでもなく、わが国の古典の筆頭に位置する書であり、古典中の古典にはかならない。近年、『古事記』への関心は、かつてない高まりを示していると言えよう。国際化の一層の進展の渦中で、「あらためて日本の「根差すところ」を見つめ直したい」という人々の切実な思いが、愈々深まってきたからではないだろうか。

そもそも國學院大學は、「日本古典の学」である「近世国学」の道統を継ぐ大学として建学された。本学においては、建学以来、『古事記』をはじめとする日本古典の研究、神道・日本文化の何たるかを究明する人文学研究が継承されてきたのである。

とりわけ近年においては、文部科学省21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」において、神道・日本文化についての学際的な検討、その研究成果の国際的発信が力強く推進された。

さらにその継続事業である「文部科学省選定オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」」においても、三矢重松・武田祐吉・河野省三らによる古典研究・日本文化研究の有り様が詳しく検証され、皇典講究所・國學院における人文学の展開が具に跡付けられたのである。

こうした先行の研究事業を承け、平成二十五年度から、いよいよ『古事記』を対象とする研究事業が推進されることとなった。すなわち、本学の「二十一世紀研究教育計画（第三次）」に基付き、「日本文化の国際的理解に向けた研

究（国際日本学）の推進」を具現化する研究事業として、「『古事記』の学際的・国際的研究」が発足するに至ったのである。

『古事記』の学際的・国際的研究」では、これまでの本学の研究成果の蓄積を承け、具体的には以下の視点からの研究を行うこととなった。

- (一) 現在望み得る最善の『古事記』の本文・訓読文を策定すると共に、最新の研究成果を踏まえたその注釈を作成する。
- (二) 『古事記』の研究史・解釈史について、特に近世・近代を主たる対象時期として、歴史的に検証する。
- (三) 歴史学・民俗学・神話学・考古学などの隣接諸科学の見地からも、『古事記』神話について検討を進める。
- (四) 海外における『古事記』研究の現状を精査すると共に、『古事記』神話と海外諸国の多様な神話との比較検討をも行い、世界の中の『古事記』の位置、その価値を考える。

本書は、以上のような課題設定のもと、平成二十五年から平成二十六年にかけて推進された研究の成果を集成し、研究叢書の（一）として刊行するものである。本プロジェクトは、今後十年を期して継続すべき研究事業ではあるが、今回はその最初の始動にあたる一年半の研究成果報告を上梓する運びとなった。

本プロジェクトの担当者一同、この研究事業の推進によって、世界の中の『古事記』の意義に思いをひそめ、世界に開かれた『古事記』学構築を目指していきたいものと切に念願している。各方面のご理解とご支援を、衷心よりお願いする次第である。